かへりて「オヽイ源九郎義經ヤアイ〳〵、早く來さいの〳〵（と呼ぶ聲に彌次郎喜多八をかしく、この義經と呼ばるゝ男をみれば、紺の紋つきの廣袖袷に、これも包みと糸楯を背負ひ、額は大あばたにて、少し片小蠻禿げたる男）「かめ非せなア（兄）ヤ片岡せなア（兄）は、やくと足が達者だアのし、うらアあくとのあかぎれさアへ、石ころがつゝばいつて、歩かれ申さぬ亀五「靜御ぜんはどうしさッたアのし義經「ヤレさて聞きなさろ、あとの立場で靜御前が持病り癇氣さア起ッたと、金玉ノウつりあげてうつちぬ（死）べいと、あけへこげへ（西風東風）に騒ぎやることよ、それにハア、六代御前が牡丹餅さア三十べし（計）もうち食ッたげで、食傷のうして、じたんばたん、せつながりやる、まんだそれに辨慶は、團子の串さアで咽笛のウつゝいたと、涙アこぼして泣きやッたけで、うらが新家の知盛どのが、三人のウ介抱して、やうやッとあとからつるん（連）で來申すは、にし（主）たさやアあに（何）も知らずにうつばし（走）ッて仕合だアのし（彌次郎）この咄しをかしく、あとになりさきになりて）「おめえがたアどけ（何所）へいきなさる義經「お伊勢さまへ參り申すは彌次「さッきから聞けば、おめえ方アは義經だの、辨慶だのといひなさるが、どういふこッたね義經「ハアそんた（其方）衆の聞きやッ

たらをかしかんべい、ユリヤハアわし共が國さアつん出て來る前に、祭禮があり申して、千本櫻といふ芝居のウし申したから、それでハア義經だアの辨慶だアのと、狂言さアおッぱじめた時、忘れない樣にと、その名をやッぺし云ひ付けて癖さア、今でもおどけ（戯）に云ふのでおざるわ彌次「聞えやした、そんならおめえは義經になッたお方と見える義經「さうでおざる、其前にわし共が國さアえ江戸芝居が來て、天神樣の狂言のウし申したが、聞きなさろ、たまげたりくつ（理窟）よ、あにがハア、時平とやら五兵衛とやらいふ惡人どのが、讒言のウせられたげで、天神樣の島流しにならしやます時、輿に乘てお出やると、あにがハア、見物のウしてをる婆樣達もかッ（嚊）樣達も、ヤレ〳〵いとしぼいこんだと、涙アこぼして、御門跡樣の通らしやます樣に、米だアの錢だアのと、舞臺さアへ蒔き散らかいて悲しがりやる、そこでハア、見物の中から博勞の與五左と云ふづないふと（無上人）が、舞臺さアへ駈出いて云やるにやア、此芝居アならないぞ〳〵、あぜ天神樣ア島流しにせるのだ、最前お出やッた長樂寺樣の閻魔樣ア見る樣な、お公家どのが惡人だア、あにも天神樣に科アない、如何に芝居だアとッて、ふと（人）を馬鹿にしたこんだア、天神樣のしりやア此博勞の與五左衛門がもつ

は、時平どのは俺が相手だと、あにハア、御年貢米の二俵ッぺしもさしやアげ(差上)る力のあるせな(兄)アだんて、誰もうツたまげて挨拶のウせるふた(人)アなし、見物もくちやうく(口々)に、與五左殿さうだ、その時平とやらアしよ曳出してぶツたゝけと、あにハア、村中の若いふと(人)達が、樂屋さアへ跳ねこんで、らんごくをやると思ひなさろ、さうせると江戸役者の時平どのは、コリヤたまらないと、尻のウおツぱしよツて、つんぬげ(逃)申した、それからハア、名主どんへ寄合つけて、もう此村へ江戸役者ア入れさるなと談合のウして、わしどもが其跡の芝居さアで、狂言のウおツ始め申したが、江戸芝居よりかアぶちわれる程はやり申した(と、息せいはツての問はず語り自慢らしく話しもて行くまゝに、何時の間にか)は大雲寺に至る。この所は甘酒の名物なれば、彼の人々は打ちつれて此茶屋にやすむ。彌次郎喜多八は急ぎこゝを打過ぐるとて)

いやたかき御寺の前の名物は是も佛になれしあまざけ

斯くて此あたりより早、日も傾き、暮るゝに近ければ、いざや急がんとて草臥れし足を早めて辿り行く道すがら喜多、どうだ彌次さん、塔があかれえノ彌次「大きに草臥れた喜多「なんと申

宵の泊りは中位な宿で有ッたが、今夜は斯うしやせう、赤坂まで俺が先へ行ッていゝ宿を取りやせう、お前草臥れたなら後から徐に來なせえ、宿から迎の人を出させておきやせう 彌次「それからう、しかし宿はどうでもいいから、たぼ(女)のありさうな内にしやれ 喜多「呑みこみ山ノ〳〵(と、此處より駈拔て先へ行く。彌次郎あとより辿りゆくに、程なく御油の宿に入りたる頃は、はや夜に入りて、兩側より出てくる留女、いづれも面を被りたる如く塗りたてたるが、袖を引いてうるさければ、彌次郎兵衛やう〳〵と振りきり行き過ぐるとて)

その頭でとめだてなさば宿の名の御油るされいと逃げて行かばや

【御油ヨリ赤坂ヘ十六丁】 彌次郎兵衛あまりに草臥れければ、先づ此の端れの茶店に腰をかけたるに、主の婆々「アイ茶ア參りませ 彌次「モシ赤坂迄はもう少しだノ婆々「アイたんだ十六丁おざるが、お前一人なら此宿に泊らしやりませ、此先の松原へは悪い狐が出をツて、旅人衆がよく化され申すわ 彌次「それア氣のねえ咄だ、しかし爰へ泊りたくても、連れが先へ行つたから、仕方がねえ、エ、きついことアねえ、やらかしてくれう、アイお世話(と、茶代を置き、此所を立出で行くに、暗さは暗し、うそ氣味悪く眉毛に唾をつけながら行く。

はるか向ふにて狐のなく聲)「ケン引〳〵」彌次「ソリヤ鳴きやアがるわ、おのれ出て見ろ、ぶち殺してくれう(と、りきみかへッて辻り行くに、喜多八もさきへかけぬけ。此所迄來りしが、これもこゝへ狐が出ると云ふ咄を聞きて、若しもばかされては詰らぬと、彌次郎を待ち合せ連立ち行かんと思ひ、土手に腰をかけ、煙草呑みゐたりけるが失れと見るより)喜多「オイオイ彌次さんか彌次「オヤ手めえ、なぜこゝにゐる喜多「宿とりに先へいからと思つたが、爰へは悪い狐が出るといふことだから、一所にいかうと思つて待ち合せた(と、いふに彌次郎心づき、こいつきやつめが喜多八に化けたなと思ひければ、わざと弱わみを見せず)彌次「くそをくらへ、そんなでいくのぢやアねえわ喜多「オヤおめえ、何を云ふ、そして腹がへッたらう、餅を買つて來たから食ひなせえ彌次「馬鹿アぬかせ、馬糞が食らはれるものか喜多「ハヽヽ、おれだはな彌次「おれだもすさまじい、喜多八にその儘だ、よく化けやアがッた、畜生め喜多「アイタヽヽヽ、彌次さんコリヤどうする彌次「どうするもんか、ぶち殺すのだ(と、うッかりした所をぐッと突倒して、彌次郎その上へ乘り懸りおさへる)彌次「あいた〳〵彌次「痛かア性體を抓はせ〳〵喜多「アレサ尻へ手をやッてどうする彌次「どうするもんか、尻尾を出せ、出さずば斯らす

る(と、三尺手拭を解き、喜多八が手を後へ廻して縛る。喜多八をかしく、わざと縛られてゐると)彌次「サア〳〵さきへ立つて歩け〳〵(と、喜多八をくゝり、後から捕へておッたて〳〵、赤坂の宿に至る。早いづれの旅籠屋にも、客をとめて、門に立ちゐる女も見えず。彌次郎は宿から迎ひの人がもはや出さうなものとうろつく内)喜多「コウ彌次さん、いゝかげんに解いてくんな、外聞の悪りい、人がきよろ〳〵見てわりいわな彌次「エヽ、くそを食らへ、ハテ宿は何處だしらん喜多「ナニ俺れはこゝにゐるものを、だれが先へ宿を取つて置くものだ彌次「まだ

吐かしやアがるか、吝生め（此内向ふより來る宿屋の男）「あなた方は當宿お泊りでおざりませぬか 彌次「きさま迎ひの人か 宿屋「ハイお左樣でおざります 彌次「それ見たか此化け損め（と、喜多八を杖にて一つくらはせる） 喜多「アイタ、、、、どうしやアがる（宿屋の男膽をつぶし）あなた方外のお連れ樣はまだお後でおざりますか 彌次「ナニもうわッち一人さ 宿屋「ハア夫では間違ひました、私方のお泊りは十人樣ぢやと承りました（と、此男はそう〳〵行過ぎる。また或る旅籠屋の店さきにて） 亭主「お泊りかなもし（と、駈け寄つてとらまへる） 彌次「イヤ連れの者が先へ來た筈だが 喜多「その連れはおいらだはな 彌次「エ、いけしぶとい奴だ、もう能いかげんに尻尾を出しをれ、イヤ待て〳〵、あそこに犬がゐる、コ、、、シロコ、、、オ、シキ、オ、シキ〳〵、ハ、ア犬が來ても、いけやしア〳〵として居るから、さては狐ではねえ、ほんとうの喜多八か 喜多「知れた事、わりい洒落だ 彌次「ハ、、、、サアおめえの所へ泊りやせう（と、心解けて喜多八がいましめを解くと、宿屋の亭主）「サアお這入りなさりませ、ソレお湯をとッて來い、お座敷はえいかな 喜多「ア、とんだ目に逢ッた（と、脚を洗ふ、此うち宿の女荷物を座敷へうち通りて） 彌次「ホンニ喜多八了簡しや、おらア

實にほんとうの狐だと思ひ詰た 喜多「馬鹿〳〵しい目に逢ッた、いまだに此手首がぴり〳〵する 彌次「ハ、、、、併し待てよ、斯うはいふものゝ、やッぱり是れが化かされで居るのぢやアねえか、どうやらをかしな心持だ（と、むじやうに手を叩き）「御亭主〳〵 亭主「ハイお呼びなさりましたか 彌次「コレどうも合點が行かぬ、爰は何處だ 亭主「ハイ赤坂宿でおざります 喜多「ハ、、、、彌次さんどうしだのだの 彌次「エ、まだはぐらかして居やアがる（と、いひつゝ眉毛をぬらして）「御亭主さん、なんとこゝの内は卵塔場ぢやアねえか 亭主「エ、なによチおッしやる、 喜多「ハ、、、、おもしろえ〳〵（と、此内勝手より宿の女）女「お湯にお召しなさりませ 喜多「サア彌次さん、先づ湯にでも入ッて氣を落ち着けるがいゝよ 彌次「吝生めが、糞壺え入れようと思ッて、その手をくふものか 亭主「ナニ湯は清水でおざりますから、奇麗でおざります、マアお出でなさりませ（と、勝手へ行く。女茶をくんで來たり）「モシ御淋しがア女郎さん方でもお呼びなさりませ 彌次「馬鹿云ふな、石地藏を抱いて寢ることアいやだ 女「ホ、、、、、いなことをおッしやります 喜多「そんなら先へ這入りやせう（と、喜多八湯殿え行く。此内亭主又座敷へ出で來り） 亭主「ときにお客樣へ申上ます、今晩は私方にすこし祝ひ事がおざりますから御酒を

一ッあげませう(と、いふうち、勝手より酒さかなもち出る) 彌次「お樽ひたさるな、なんぞお目出度ことかの 喜多 ハイ左樣でおざります、私の甥めに嫩を貰ひました、今晩婚禮を致させますから、おやかましうおざりましよ(と、云ひすて〻立て行く。喜多八風呂より上り) 喜多「何だ奢りかけるの 彌次「こゝの内に婚禮があるといふことだ、エリヤ愈々彼奴めがはぐらかすに極まッた、もう水風呂へも這入るめえわえ 喜多「エ、おめえもい〻加減にしな、さりとは執念深えこッた 彌次「いや〳〵、めッたに油斷はならぬ、この硯蓋もこんなに甘味さうに見えても、性は馬の糞や犬の糞だらう 喜多「ホンニ、さうだらうから、おめえは見てゐなせえ、こいつは有難え、お辭儀なしにやらかしやせう(と、喜多八手酌にてさッ〳〵と飲みかける。彌次郎例の意地がきたなく、流石に見てもゐられず、まじ〳〵して)「いめえましい、氣を惡くさしやがる 喜多「氣遣えはねえ、一杯飲みなせえ 彌次「イヤ〳〵、馬の小便だらう、ドレ匂ひをかゞして見せや、ムウ〳〵、これやア本統のやうだ、どうもこらえられぬ、ア〻まい〻よ、やらかせ(と、一杯ついで飲み、舌打しながら)「酒だ〳〵、ドレ〳〵、肴オット此玉子はどうも色合が氣にくはねえ、海老にしよう、カリ〳〵〳〵、こいつは本統の海老だ〳〵(と、

ひッかけ〳〵、さいつおさえつ、さつ〳〵と飲みかける。此内勝手の方は椀家具の音、がたびしと騷がしく、とりとみ最中、離れ座敷には、はや婚禮の盃事始まりしと見えて謠の聲する)「四海波靜かにて、國も治まる時津風、枝を鳴らさぬ御代なれや、あひに相生の松こそめでたかりけれ 喜多「ヤンヤア 彌次「コウ喧しいわえ 喜多「喧しいはい〻が、おめえ先刻から盃を放さねえ、ちッとこッちへ廻しな、ホンニ馬の糞だの小便だのと云ふかと思やア、やみくも一人で喰ふやつさ、ハ〻〻〻 彌次「おらア正直化された氣になッて居たが、今思やア、さうでもねえ、とんだ苦勞をさせやアがッた 喜多「エ〻おめえの苦勞したよりかア、おらア縛られて、へんちきな目に逢ッた、ハ〻〻〻(と、此内勝手より膳も出で、かれこれするうち、奥の座敷にて又謠うたふ)「千代もかはらじ幾千代も、榮え榮ゆる松梅の、ふたばの竹のよをこめて、老となるまでと結ぶぞ樂しかりける、めでたい〳〵、三國一の嫩をとりすまいた、しやん〳〵〳〵(と、手を打ち叩き、ざゞめきわたる。此内勝手より女來り)「あなた方もうお床をとりましよか 彌次「そんなことにしやせう 喜多「コレ女中、祝言はもう濟みやしたか、さだめて嫁御は美しからう 女「アハサ、聟樣も美い男、嫩御樣もえらい姿色よしでおざります、お氣の毒な

ことは、あちらの座敷に寢やしやりますから睦言が聞えましよ 彌次「なんだそんな手合と割床はあやまる 喜多「こいつは大變〳〵 玄「モウおしづまりなさいませ(と、出て行く。二人もそのまゝ寢かけると、はやふすま一重隣の座敷に聟と嫁が寢る樣子、ひそ〳〵と談しするを聞けば、下地からいろどどにて貫ひし嫁と見えて、なか〳〵初對面とは見えず、ぷッたり抓つたりして、いちやつく樣子、手にとるやうにきこえ、彌次郎兵衛喜多八は寢もやらず) 彌次「エヽとんだ目に逢はしやアがる 喜多「ホンニわりい宿をとッた、人の心も知らずに、なんだか恐ろしく睦じいな、畜生め 彌次「サア談し聲が止んだからむづかしい(と、だん〳〵蒲團からのり出して、隣の樣子をきゝ耳立て、寢られぬまゝに彌次郎そッと起きたち、襖の隙間からさし覗く。喜多八も裸のまゝ這ひおきて) 喜多「コウ彌次さん、嫁は美しいか、おいらにもちッと見せてくんな 彌次「コリヤしづかにしや、肝心の所だ 喜多「ドレ〳〵見せねえ 彌次「アレサひッぱるな、喜多「それでもちッと退きなせえ(と、彌次郎が夢中になりて覗きゐるをひき退けんとひッぱれども、退かじと意地張るはづみに、ばッたり襖があちらの間へ倒れると、二人も共に襖の上へころげる。聟も嫁もおしにうたれて、きもをつぶしむこ「あいた〳〵〳〵、コリヤどやつぢ

やい、なんぜ唐紙を打こかいた(と、跳ね起きた所が、行燈もひッくりかへして、まッくらやみゝ彌次郎はちやッと逃げて、おのが寢床へ這ひ込む。喜多八まご〳〵して、かの聟につかまさり、詮方なく) 喜多「御免なせえ、手水に行くとッて、ツイ戸まどひをしやした、ぜんてえこゝの女中がわりい、夜座敷のまん中に行燈を置くから、それに躓つまづいてお氣の毒だ、アア小便が漏るやうだ、ちよッといッて來やせう、こゝを放してくんなせえ むこ「いやはや、呆れたお人達ぢや、夜着も蒲團も油だらけになッた、コリヤおさん〳〵、だれぞ早うおこしてくれぬか(と、呼び立つる聲に、勝手より下女が火を點して來り、そこら片付けるに、喜多八も手持なく、はづれし唐紙をはめて引き立て、やう〳〵にことわりいうて、もとの寢床へかへり、すご〳〵と寢かける。彌次郎をかしくふき出して)

寢て聞けばやたらをかしや唐紙と共にはづれしあごのかけがね

喜多八も夜着うちかぶりながら

聟嫁のねやをむせうにかきさがしわれは面目うしなひしとて

斯くうち興じて、夜も更けゆくまゝに双方しづまり、只鼾の聲のみたかくなりぬ。

東海道中膝栗毛四編 卷之上終

東海道中膝栗毛四編 卷之下

【赤坂ヨリ藤川へ二里九丁】鷄の聲萬戸に響きて、ひきつろゝ課役の馬の嘶き勇ましく、既に夜明けゝれば、彌次郎兵衛喜多八も起出て、大略に支度整へ、早くも赤坂の宿を立ち出でけるに、此宿の出端より、後になり先きになり行く三人づれの旅人、是も江戸者と見えて、少し勇み肌の卷舌にて話し行くを聞けば 一人の男「コウ昨宵の泊はをかしかッたなア 今一人「ソレヨ、なんだか奥の間に泊つてゐた奴等ア氣の利かねえ野郎どもだ、宿に婚禮があるを羨しがりやアがッて、襖の間から覗きをつて夢中になり、とう〳〵襖をぶッこかしやアがッた、大笑ひな箆棒どもだ 今一人「それからその聟に謝るざまア、あの騒ぎでおいらも碌に寢られなんだ、いめえましい 一人男「そしてアノ一人の野郎めは、なんだか宵に宿の亭主を呼びやアがッて、こゝのうちは卵塔場ぢやねえかと云やアがッたが、あの箆棒めはどうでも氣が狂れてゐると見える(と、此手合、昨宵彌次郎喜多八が泊りし内に一所に泊つたと見えて、此咄しをする。彌次郎聞きて大きにあつくなり、足早にかけより、制をかけ) 彌次「コレ

貴様達やア先刻から默つて聞いてゐりやア、おいらがことを笹棒とア、なんのこッた前ノ男「ナニ・こんた衆の事ぢやアねえ、こッちのことだわ 彌次「こッちの事と云ふことがあるものか、昨宵の宿での事をぬかすのだらう、その襖をぶッこかした笹棒と云ッたア おれが事だわ、旅人「ハア、こんたア其べらぼうか 彌次「オ、其べらぼうだ 旅人「ハ、、、、笹棒だから笹棒と云つたがいゝぢやねアえか 彌次「イヤこいつ惡く酒落やアがる 旅人「糞をくらへ 彌次「なんだ糞をくへ、コリヤおもしろえ、食ふべいから持つてうしやアがれ(と、彌次郎眞ッ黑になッて力む。されど相手は血氣盛んの勇みでやひ、馬の糞を杖の先につッかけさし出し)「サア持ッて來たから、食らへ/\ 彌次「イヤ馬の糞は嫌ひだ 旅人「嫌ひと云ふことがあるものか、是非食はせにやアおかぬ(と、三人かゝッて彌次郎を手込めにする。喜多八をかしく、中へはいり) 喜多「イヤもう御免なせえ、誰でも同然でござりやす 三人「ハ、、、堪忍してやらう(と、行き過ぎる。彌次郎とても叶はぬと見て、たゞ口のうちに、ぶつくさ/\)此内桐の木、中柴を打過ぎ、山中に至る。爰は麻の網袋、早縄などを商ふなれば、喜多八

みほとけの誓ひと見えて寶藏寺なむあみ袋はこゝの名物

かくて藤川にいたる。棒鼻の茶屋軒毎に生肴を吊し、大平皿鉢、店さきに並べたてゝ、旅人の足をとゞむ。彌次郎兵衛

ゆで蛸のむらさきいろは軒ごとにぶらりとさがる藤川の宿

それより此宿を打過ぎ、出はなれの怪しげなる茶店に休みて 喜多「なんだか、どうてきに蟲がかぶる、婆さん素湯はあるめえか 茶屋の娘「ハア素湯はござらぬ、水を進ぜませうか 喜多「エ、藥を呑むのだえ、コリヤ堪なくなッた、時に雪隱は何處にある 茶屋の娘「何處にとッて、そんなにおいへ(屋上)を見廻しても、雪隱が疊の上にあるものか、裏へいかッし 喜多「ヒヤア突きあたりに見える/\(と、裏へ出で雪隱へゆき、しばらく用達して出で、あたりを見れば、このうらに物置を住居とせし一ッ家あり。内に十八九の娘、髪は取り亂しゐれども、なか/\の上代もの、只一人居る樣子。喜多八の惡洒落にて、ずッと此内へ這入りて笑ひかけ)喜多「モシ御無心ながら水を一つ(と、手を洗ふ内、娘はげら/\、笑つてゐる) 喜多「コウ姉さん、おめえ何を笑ひなさる、そして一人此處に居なさるのか、無用心な(と、あたりを見れども、外に人はなし。喜多八腰をかけて、煙草すひつけ)「へ、氣味の惡い、何を見て笑ひなさる、コレ

サ何を笑ふのだよう(と、娘の手をとつてひつぱるに、さすが振り切りもせず、やッぱり笑ッてゐる。喜多八こいつは有難い、もうしめた者だと、ぐッと引きよせる。いつの間にやら子供が見つけて)「ロアイ〳〵、あの人は氣ちがひと色事をせるやア、ハ、、、(と、大聲をあげて、笑ひ駈け出す。喜多八びッくりして逃げ退かんとするに、娘はつかみついて放さず)親「エ、この男め、放さん〳〵」喜多「これは情ない(と、無理に引き離さんとする所え、この娘のおやぢ立ち歸つて)親「コリヤ我徒は若い女子を捕へて何せるのぢや」喜多「イヤ何にもしませぬ、親「せんものが、なんぜ(何條)女一人をる内へ這入らッせえた、コリヤじやうち(承知)ならんわい」喜多「ナニサ、今用達しに行ッて、ッイ水をもらッたばかりさ」親「インニヤ、あれは氣ちがひでござる、こなさん氣のちがうた者をとらへて、弄みかけさッせえたに違ひはあらまい」喜多「ナアニとんだことを」親「インニヤ、酒まん〳〵、氣違ひと侮ッて、ひゆッと此方さんが、やりからかいたに、ちがや(違)しよまい、とかう(兎角)云はッせるな、此分では濟まんぞ〳〵(と、わめきちらかし大騒ぎをやらかす。此の内彌次郎兵衛表の茶店に待ち居たりしが、喜多八手水に行ッて戻らぬ故、後から見に來り、先程より此の樣子を片陰に見てゐて、を

かしさこらへられず、併しもう出かけてやらうと、うそ〳〵出できたりて彌次「御免なせえ、わちッやア此男の連のものだが、委細聞きやした、こいつめもあのやうに見えても、ありやうは、ちッと氣が狂れてゐやす、了簡してやッてくんなせえ、エ、此野郎めよく世話を燒かせる、アノ面わよ、アレ見なせえ、きよろ〳〵する顏が證據、娘御は女だけまだしも、イヤモこの氣狂には困り果てやす」親「イヤ〳〵さうではあらまい、ナニ、あの人が氣狂ひなものか」彌次「ハテサあの頬付を見なせえし、アリヤ〳〵あの通りだ」喜多「なんだ、おれを氣違だ、コリヤ面白い、ハ、ア降るは〳〵、アレ〳〵花の吹雪が、ちりやたらり、うんきんたらり、かんきんちり〳〵、ちりかゝるやうでおいとしうてねられぬ、ト、〳〵、ヤアそこに居るは女房どもか、イヤ好い女房ぢやに〳〵、コリヤのほいほゝい、さんなあろかいな、ヤンヤア」彌次「アレ御らうじろ、あの通り、其癖あの面で色氣狂さ、それだから女と見るとびろ〳〵して、ほんに恥を云はにやア理が聞えやせぬが、此奴めはわしが弟で、イヤモこんな因果なことアござりやせん」親「ハアこなさんがさう云はッせると、わしも悲しい、見さッせる通り、たんだ一人の娘がこの病で、わしはおッき(大)な苦患でござる」彌次「察して居り升、エ、この馬鹿野

耶め、何をげら〳〵笑ふのだ、時に親父さん、おやかましうござりやした 與「マア茶でも喫んでござらッせえ 彌次「もうめえりやせう、サア氣狂め、うせをれ(と、彌次郎兵衛が、ちやらてらに、やう〳〵と、まひ治まり、彌次郎兵衛、喜多八を連れて、こゝを脱がれ出かけ、はては大笑ひとなりて)

口說きたる娘はほんの氣ちがひにこちやまちがひとなりし目ちがひ

かく打興じてこゝを立ち出で行く道すがら 彌次「コウ喜多八、手めえもとんだものだ、氣の違ッた娘をとらめえて、どうしようと思ッて、業晒しな男だ 喜多「エ、面目次第もねえ、併しわッちまでを氣違とは、彌次さん、ありやおめえ一生の出來だぜ 彌次「酒でも買やれ、時にそれに付て咄がある、丁度手めえのやうな氣まぐれ者が、きちげえの女をとらへて、じやらつきかゝると、其女のおやぢが見つけて腹を立て、ヤイ此野郎奴は、人の内へ斷りなしに牛込やアがッて、娘をちよろまかさうとか、ソレヤア赤坂ベイだはえと云ふと、手めえも負けぬ氣になり、イヤうぬなんだ、喙をとんがらかし(尖)て四ッ谷鳶のやうだとちやかすと、さきのおやぢが、オヽ俺が四谷鳶なれやア、うぬは八幡さまの鳩だといふ、コリヤをかしい、此喜多

八がなぜ八幡樣の鳩だといふと、親仁がハテ貴樣は氣違えの豆を食はうとしたぢやアねえかと、ハヽヽヽ 喜多「なんだ市谷の地口は恐れる、ハハヽヽ(と、打笑ひつゝ行くほどに、小豆坂を過ぎ、岡の江、遊善寺を打越えて大平川にいたる)。

岸に生ふ芹のあをみに小鴨までみづに浸たれる大平の川

それより大平村を過ぎ行くほどに、岡崎の驛に至る。

【岡崎ヨリ池鯉鮒ヘ二里二十丁】 爰は東海に名だたる一勝地にて、殊に賑はしく、兩側の茶屋何れも奇麗に見えたり 茶屋「お休みなさりまアし、お飯をあがりまアし、よい諸白もおざりまアす、お這入りなさりまアし〳〵 彌次「ナント、腹がすこし御座ッたぢやアねえかた 彌次「あねさん、お飯にしよう、なんぞ甘えものは無しかの 女「ハイよい鮎の肴がおます 喜多「ナニ、鮎の鮨だ 女「オホヽヽヽ(と、笑ひながら、鮎の煮びたしをつけて膳を持ち來る) 彌次「ドレ〳〵、こいつはうめえ、そしてがうてきに白い飯だ 喜多「エ、外聞の惡りいことをいふ、アレ女が笑ッていかゞ、あいつめは顏中が靨だわえ 彌次「靨ならいゝが、頬ぺたが窪んで、蹈返しの

馬蹄石といふもんだハ、、、、(と、例の悪口たら〳〵酒落てゐると、此内奥座敷には近在の客三人ばかり、此の宿に流連し、帰りがけと見え、相方の女郎、この所まで送り來りしと見えて、別れの酒盛大騒ぎにて、此宿のこうき節唄ふ聲賑かに聞ゆる 唄「菊に離結ひ込められて、今は忍ぶに忍ばれず、チツテレ、トツテレ(と、大騒ぎをやる故、喜多八彌次郎奥の方を覗き見れば一人の客の聲として)「コレ〳〵、太兵盃はどうせるのぢや太「イヤ、仁兵のねき(側)にあらアず仁「ドレ、おれひら(拾)はう太「改めていこしやれ仁「オト、、、こないに受けては、とかうはあらまい、ソレ差そかい太「オット、受けた、ひゆツとやりからかいて、これから門もツこうへ戻らうまいか、但しは桝屋か丁子屋へ行かうまいか 女郎いくの「なんぢやいし、アノ太兵さんはナア、酔ひなさるとナア、あのやうのことと云うてぢやがナア、外へやりますことはナア、ならまいわいなア太「イヤイヤ、かゝる折から橋屋で手形請取ツに代物があるから、行かざならまい 女郎「ムウ、さうかいし仁「さうとも〳〵(チツテレ、トツテレ。乗て手管と、わしや知りながら、だまされて咲く宝の梅、ハ、、、(と、此内空尻の馬二三匹追ツたて來り、此茶屋の軒に繋ぎて、馬士共中庭より奥へ通り)「旦那方、お迎ひに參りました 三人「御太儀〳〵、

お名殘惜しいがこれで別れざならまい 女郎「久しかぶりで是からまた鳴海のお鶴さんぢやおませんかいな太仁「ハ、、、、、サアいかうまいか 茶屋の女「御機嫌能う(と、それ〳〵に挨拶するうち、三人の客は銘々空尻馬に打ち乗り、暇乞して乗り出す。女郎送り出してさま〳〵の酒落もあれども略す。彌次郎喜多八始終此態を見て、女郎買のからしり馬で歸るもをかしいと打笑ひながら)

三味線の駒にうち乗り歸るなり岡崎女郎しゆ買に來ぬれば

かくて二人も此所を立出で、宿はづれの松葉川を打越え、矢矧の橋にいたる

欄干は弓のごとくに反橋やこれも矢はぎの川にわたせば

それより藤坂町、尾崎の郷、今村の立場につく茶屋の婆「名物、砂糖餅お召しなさりまアし、お休みなさりまアし〳〵 喜多「オイ此餅はいくらづゝだ 餅屋の亭主「三文でおざります 喜多「こいつは安い、ちらの鶏焼はいくらだの 亭主「これも三文 喜多「イヤこれは三文では高いやうだ、ナント御亭主、かうしなせえ、これを二文にまけてくんなせえ、その代り、そちらの丸い餅は四文に買ひやせう(亭主こいつは變ちきなことを云ふと思へど、どちらにしても損のいかぬこと故)

亭主「ハイ、ようおざります、お取なさりませ(喜多八煙草入から錢二文取出して)「四文あらば丸いのを買はうと思ッたが、二文あるからこの鶉燒にしやせう(と、鶉燒をとッて打くらひながら行く) 彌次「ハ、、、こいつは喜多八でかした、流石の亭主も膽ばかり潰ぶしてゐやアがッた 喜多「ナンド智恵はすさまじからう 彌次「へ、箆棒め、おれもその位なことをしかねるものか、ハ、、、

わづかでも慾には耽るうらづらやき三文ばかりの智恵をふるひて

かく興じ笑ひつれて、西田街道より半里計り北の方に、名にし負ふ八ッ橋の舊跡を思ひて

八ッはしの古跡をよむもわれ〳〵が及ばぬ恥をかきつばたなれ

程なく池鯉鮒の驛に至る。

【池鯉鮒ヨリ鳴海へ二里十二丁】 馬士の唄「みやで泊ろか、お龜にしようかナア、たゞしや岡崎よい女郎衆、ナア、ドウ〳〵 彌次「いめえましい、草鞋で足を痛めた、ちッとの間草履でから行、モシ〳〵此藁草履はいくらだね 亭主「アイ〳〵十六文でおます 彌次「こいつは安い(こゝの亭主伊勢者にて商は巧者なり) 亭主「アイお安おますわいな、わたしとこの草履は、ひゆ

ッと丈夫で、ねから切りや致しませぬ 喜多「ねからア切れめえが、先の方から切れるだらう 亭主「イヤお穿なされてはたまらまいが、しまッて置きなさると、何時迄もおますわいな 彌次「さうだらう、そしておめえのとこの草履は鼻緒があッて重寶だ 喜多「鼻緒のねえ草履が何處にあるものだ 彌次「何にしろ、安いものだ(と、吊しある草履を引ッきり、とッて見て)「イヤこの草履は、ちんばだわえ、片々は大きくて、こッちらは小いやうだ、コレヤア八文ッゝにしちやア、大きな方は安いが、小な方は高いものだ、ナント御亭主、片ッぽの大きな方を九文に買ひやせうから、こちらを七文に負けてくんなせえ 亭主「アイようおます、お召しなされ 彌次「南無三錢が足りない、一足買はうと思ッたが、たッた七文ほッきやア(計)ねえから、アノこッちらのかた〳〵の方ばかり買ひやせう 喜多「ハ、、、こいつは大笑ひだ、おいらの眞似をしようと思ッても、餅ならいゝが、草履片々が何になる物だ 亭主「お左樣でおます、一足おしなさりませ、どうも片々離してはあげられませんわいな 彌次「ナニ、かたッぽ(片方)は賣られねえか、流石は田舍だけ、物が不自由だ 喜多「エ、、江戸だとッて、ナニ草履を片々賣るものがあるもんだ 亭主「なんなら之になさりませ、これぢやとて一足で七文にしてあげませうわいな 彌次「エ、、馬

のくつが、穿かれるものか、人じらしな 耳多「一足買ひな、おめえ片ッぽ買ッてどうする積りだ 彌次「また先へ行ッて片ッぽ買はう 亭主「ハ、、、、十四文にいたしませう、一足お召しなされ 彌次「貴様、と ッくにさう云へばいゝ(と、やう〳〵の事にて、草履を調へ、草鞋をぬぎ捨てゝ、穿きかへゆく)かくて此宿を打過ぎ、早くも八町畷、さなけ明神を伏し拜み、今岡村の立場に到る。此の所はひもかはといふ麺類の名物、至ッて風味よしと聞きて

名物のしるしなりけり往來の客をもつなぐひも川の蕎麥

それよりあなふ村、落合村を過ぎ行きて、有松に至り見れば、名に負ふ絞の名物、色々の染地、家毎に吊し飾りたてゝ商なふ。兩側の店より旅人を見かけて「お這入り〳〵、貴方お這入り、名物有松絞お召しなされ、サア〳〵これえお這入り〳〵 彌次「エ、、やかましい奴等だ。

欲しいものありまつ染よ人の身の油しぼりし金にかえても

耳多「ナンと、彌次さん浴衣でも買はねえか 彌次「おもいれ見倒してやらうぢやアねえか 耳多「よからう、たんと買ふ面をして弄さんでやらう(と、あちらこちらを見廻すうち、此町のとッぱづれに、小見世なれども染地色々表に吊しある内え這入りて) 彌次「コレ此絞はいくらします

(と、云ふに、此内の亭主と見えて將棊を指してゐたるが、餘念なく有頂天と成ッて)亭「サアしまッた、時にお手はなんぢやいな 彌次「コレサ、これやアいくらだといふに(と、すこし聲高に云ふと、亭主膽をつぶして)亭主「ハイ〳〵それかな 彌次「いくら〳〵 亭「コウト、あなたいくだとおッしやる、そこで斯様にいたそかい 彌次「エ、、小じれッてえ、コレ、賣らねえのか、直段はいくらだといふに亭「ハエさて、やかましい人ぢや、そちらの方へ引返へして、符牒を見せなされ、只知れるものぢやないわいの 彌次「こいつはとんだ商人だ、符牒にウのと字エの字が書いてある亭「オヽ、さうぢやあろコウト三分五厘切れぢや 彌次「高い〳〵、まけなせえ亭「ナニ、まけい、イヤならまい、此不手將棊に 將棊の對手「次兵さん、マア商ひをしよまいか、貴方がたが待ッて御座らッせる亭「よいわいのウ、とても敵等はよう買やしよまい、ハテ買ひたうても金銀はあらまい、無い筈ぢや、わしが手におはしますぢやて 彌次「何だ笊棒め、金銀があるまい、人を見くびッたことを云やアがる、あるから買はう、是は犢鼻だけでいくらだえ 亭「なんぢや、犢鼻褌買はう、イヤ不躾千萬な 彌次「こいつ、おらをてう(嘲)しやアがろ、賣物買物に無躾も何もいるものか、はなッたらしめが(と、大きな聲する。亭主はッと心づきさう〳〵將棊を

止めて）「へイ〳〵、是は麁相申しました、何なとまけてあげませずに、お召し下されませ 喜多「さう云ひなされヤア、しこたま買つて上げやすは、彌次さんおめえ、お袋や内儀さまへの土産にはあれがよからう、いくらだの亭「へイ十四匁八分でおます 彌次「ソレそッちらのは亭「これは十五匁 彌次「もッといゝのはねえか亭「有りますとも、へイこれがなア廿一匁ッ、こちらが廿二匁、下のがな十九匁ッ、でおざります 彌次「ム、そんならでえじ（大事）に仕舞つて置きな、誰れぞが買ひう皆斯様な物でおざります 彌次「ム、そんならでえじ（大事）に仕舞つて置きな、誰れぞが買ひやしよう、わッちやア、いッち初手に見ておいた此三分ぎれを手拭だけ切ッてくんなせえ亭「へイさやうかな（と、膽をつぶし、二尺五寸切ッて出す。彌次郎此代を拂ひてこゝを立出で）「とんだ奴等だ、既にいゝ三太郎にしようとしやアがッた、膽つぶしな、ハ、、、、時にでえぶ路草をした、ちと急いでやりかけよう（と、これより少し道を早め行く程に、早くも鳴海の宿に着きければ）

旅人のいそげば汗に鳴海がたこゝもしぼりの名物なれば

【鳴海ヨリ宮ヘ一里半十二丁】 かく詠み興じて田ばた橋をうち渡り、笠寺觀

音堂にいたる〳〵笠を頂き給ふ木像なる故この名ありとかや。

執着の涙の雨に濡れじとや笠をめしたる觀音の像

それより、戸部村、山崎橋、仙人塚をうち過ぎ、やうやく宮の宿にいたりし頃は

【宮ヨリ桑名ヘ海上七里】 はや日暮れ前にて、棒鼻より家毎に客をとどむる出女の聲姦し 女「あなた方アお泊りぢやおませんか、お湯もちんと沸いておます、お合客はおません、お泊りなされませ〳〵 彌次「泊は何處にしよう、錢屋か瓢箪屋か 喜多「向ふのうちは何んだ鍵屋か 女「モシお泊りかな 喜多「オイ泊りやせう、旅籠はいくらだ 女「オホ、、、、ようおます、お泊りなさんせ 喜多「なんだい〳〵とか、只で泊めるか 彌次「むしのいゝ（と、笠をとッて這入る。）宿の亭主「お湯をあげうず、お足がよごれてなけらにや、直ぐにお風呂へ御召しなされませ（と、荷物を座敷へ運ぶ、此内彌次郎喜多八も草鞋をぬぎ、奥へ通る。女、茶を持ち來り）「お茶あがりませ 座頭の按摩「お療治をなされませぬか 喜多「療治もしてえが、マア腹がへッた 彌次「饂飩でも食つて來や、此處の名物だ 按摩「さやうなら後に來ませず（と、立つて行く。あとより二三人連れにて、弓張提灯をともし）「ハイお泊りでおざりますか、是は當驛のおんばこ

さま、手水鉢の建立、お志をお頼み申します 彌次「ハイ、喜多八そけえあげてくりや 喜多「是は少しながら(と、錢八文出してやると、帳に記して出て行く。入かはりて坊様が一人)「ハイ私は六十六部の石碑を建てます、お心持次第お施主につかッせえて下されませ 彌次「なんだ石塔の施主につけ、いめえましいことを云ッて來る、ソレ持ッていきなせえ(と、同じく八文ほうりだしてやる。入かわりて此うちの亭主ひよッくり顔を出せば) 彌次「エ、又八文か、貴様は何の建立だ 亭主「イヤ明日はお船でおざりますか、又佐屋廻りをなされますか 喜多「すぐに爰から舟にしやせう 彌次「舟はいゝが、おいらアどうも船では、なぜか小便するが怖はくて、そしてねッから出ねえには困る、七里乘るといふもんだから、こらへては居られず、どうしたものだらう、佐屋へ廻らうか、ノウ喜多八 亭主「イヤそれには好い物を上げうず。左様のお方には私がいつも竹の筒を切つて上げますから、それでお小用なされるがようおざります 彌次「そんならそれをお頼み申しやす 亭主「ハイ〳〵先御膳を上げう(と、立ッて行く。此内女膳を持ッて來る。こゝにても色々あれど略す。やがて膳も濟みたるころ、先ほどの按摩來り)「旦那方、致しましよかいな 彌次「サアやらかしてくんなせえ(と、これより彌次郎按摩に揉ませる。この

内隣座敷に泊り合せし瞽女二人が、慰みに三味線を出して、伊勢音頭をうたふ聲する) 唄「花もうつろふあだ人の、浮氣も懇といはしろの、結びふくさの解きほどき(ハリサ、コリヤサ)よい〳〵〳〵よいとなア(ツテ、チレ〳〵〳〵) 喜多「イヤこいつ、いい聲だ、ナント按摩さん、わしは踊りが上手だ、おめえ目が見えると、あの唄で一つ踊ッて見せてえもんだがなア 按摩「わしも好きだがなア、踊らッせる音を聞かアず、一つやらッしやらまいか 喜多「やるはやらうが、賞めて貰はにやア張合がねえから、かうしやせう、わしが踊りしまッた所で、おめえのつむりを一寸撫でようから、夫れをきッかけに、やんやアと賞めてくんな、よしか〳〵、ソレ踊るぞ 踊りの唄「解けぬ思ひは二つ箱、三つ四ついつもとまり舟、それが苦界のゆきちがひ、ハリサ、コリヤサ(と、三味線に合せて、喜多八手を叩き踊る眞似をして) 喜多「よい〳〵〳〵よいやさアと、踊りしまひ、座頭の頭をちよいと足にて撫でると 按摩「ヤンヤア、えらい〳〵、ハヽヽヽ 喜多「なんと面白からう、も一つやらうか 隣りの唄「さす手引く手にわしや何處までも、浪の浮寢の梶枕 喜多「よい〳〵〳〵よいやなア(と、又足にて座頭のあたまを撫でる) 按摩「ヤンヤ〳〵 喜多「ハヽヽヽおもしろえ〳〵(と、此内やどの女)「お湯にお召しなされませ 喜多「彌次さんもう

しめえか、しめえなら湯に入りなせえ、按摩さんが踊りを賞めてくれた代りに、これからわッちも揉んで貰はう 彌次「ドレそんなら這入ッて來よう(と、彌次郎は湯に入りに行く。あとにて按摩は喜多八を揉みにかゝり) 按摩「時に旦那方は、ちと當宿のおつるでもお呼びなされ、 喜多「イヤそれよりかア、隣の三味は此家の娘か、何人だの 按摩「あれは二三日前から、こゝの内に泊ッてゐる菩女でおますが、よい聲だなもし、併しまんだわしが甚句を旦那方へ聞かせたい 喜多「コリヤよからう、やらかしねえ 按摩「その代りわしも賞め手が無けらにや、張り合が無い、唄ひしまッたら、旦那賞めて下さるかな 喜多「オット承知〳〵 按摩「ドレやりからかさう(と、喜多八がつむりを揉みながら、拍子をとりて、あたまをぴしや〳〵) 按摩「ジヤ、ジヤンン〳〵、エヽヽ、醉うた醉た〳〵五勺の酒に、一合飲んだらさままたよかろ(と、唄ひさして、喜多八が耳の中へぐッと指をつゝ込み)「こいつが最前我等が頭を足蹶にひろいだはッつけ野郎め、かッたい野郎め、うぬがよな野郎は、ろくではゆくまい、揚句の果には首でも吊るぢやろ(と、云ひさして、耳の穴より指を拔ば耳はポンと鳴る) 按摩「ヤットサノセ〳〵(喜多八耳の穴を塞がれて、己がことを惡く云はれたをも知らず) 喜多「ヤンヤ〳〵 按摩「ジヤ〳〵、

ジヤン〳〵(と、拍子にかゝッて、喜多八があたまをぴしや〳〵と叩く、喜多八顰をしかめて)「面しろえ〳〵 按摩「も一つやろかいな 喜多「イヤもう、御免だ、あたまがたまらぬ 按摩「ハヽヽヽ、えらう面白かッた(此内彌次郎風呂より上り、此樣子をちらと見て) 彌次「和尙もッとやらかしねえ 喜多「イヤおいらはもう、湯に這入ッて來よう、按摩さん、もういゝにしよ(と、云ひすてゝ、風呂場へ行く。按摩は暇乞ひして歸ると、うちの女、床をとりに來り、蒲團を敷きて勝手へ行く。彌次郎は、はやその儘寢かける。此内喜多八も風呂場より歸りて) 喜多「オヤ彌次さん、もう寢かけたの、ときにおめえ隣座敷のしろものを見たか、とんだ美しい菩女だ、 彌次「菩女なら目があるめえ 喜多「目はねえが、まんざらぢやアねえ、今湯からあがッてくろとき、一人の菩女めが手水場にまどついてゐたから、小當りに當ッて置いた、なか〳〵野暮でねえ代物よ 彌次「ドレ〳〵(と、這ひ起きて乘り出し、襖の間からさし覗き)「ハヽア、うしろ姿はなか〳〵意氣な風俗だ、コリヤこの儘では置れぬはえ 喜多「イヤ、さうはならぬ(と、いひつゝ夜着を引被り、心の内には已れ今に這ひかけてやらうと、態と寢るふりにて横になると、直に空鼾をかく。此内隣座敷もひそまり二人の菩女も寢た樣子、夜もしん〳〵と更けわたり、

後夜の鐘「ゴウン！〜、（彌次郎そツと起き上り見れば、喜多八は本當に寢入りし樣子、して
やツたりとそろ〳〵這ひかけ、襖をそツとあけて隣り座敷へ這入りみれば、瞽女二人は前後
も知らず寢入端。彌次郎瞽女の懷え這入らんとせしに、流石は目の見えぬものとて用心きび
しく、風呂敷包を兩手にしツかり抱えて寢てゐる故、これが邪魔になりて這入りにくゝ、彌
次郎そろ〳〵此風呂敷包をとり除けようとすると、瞽女目をさまし、片手に包みをかゝえ、
片手に彌次郎が手をぐツと捉えて）「盜人よ〳〵、お宿の衆〳〵、（と、わめきちらされ、
彌次郎はあてが違ひ、繻袢一ツの此なりを見つけられては衆晒しと、瞽女が手をたゝきはな
して、そう〳〵に此方の座敷へ歸り、夜着をかぶり、そ知らぬふりして寢てゐる。喜多八は
疾くより目を覺し、くつ〳〵と笑ツてゐると、此うち勝手より亭主駈けつけ「瞽女さまどう
さツせえました」「わしが此抱えてゐる包みをいんま（今）誰れやら取らうとしをりました、
雨戸でも開いてあるか見てくれなされ」亭主「イヤ何處も開いてはゐをりませぬ」「それでも、
いんまの盜人は何處から來をりましたらうな」亭主「ハア、襖が開いてある、モシ〳〵お隣のお
客樣方およツてござらつせるか」彌次「ア、ソ、、ムニヤ〳〵」亭主「ハ、アこゝに落ちてあるはな

んぢや、ムヤ蟲鼻禪ぢやさうな、モシお客樣方、これは貴方がたのではおざりませんか（と、
大きな聲するに、彌次郎ハツト思ひ、そツと頭をあげて見れば、わが犢鼻禪が瞽女の枕もと
から敗居越しに我が枕もとまで長くなツて落ちてゐる故、をかしさもをかしく、流石おれが
のだとも云はれず、もじ〳〵してゐると、喜多八わざと意地惡るく起きあがり）喜多「なんだ
え、そう〳〵しい、犢鼻禪が落ちてあるとは、ドレ〳〵、それか、コレヤア彌次さん、おめえ
の犢鼻禪ぢやアねえか」彌次「エ、情ないことをぬかしやアがる（と、喜多八が夜着の袖を引く。
亭主もさてはと承知して、心の内にをかしく思ひながら）亭主「イヤもう旅の事でおざりますか
ら、お互にお氣をつけて、御用心なさるがよい、瞽女樣、もうお休みなされ」「氣味が惡くて
寢つかれませぬ、能うしめて行ツて下さりませ」亭主「左樣なら（と、そこらたて廻して出て行く。
彌次郎そツと手を延して犢鼻禪を手繰り寄せる。喜多八をかしく吹き出しながら）

瞽女どのに思ひこみしは是も又戀に目のなき人にこそあれ

すでに夜もいたく更けわたれば、皆々漸く一睡の夢を結ぶ。曉の風樹木を鳴らし、浪の音
枕に響きて、撞き出す鐘に驚き、目さめて見れば、はや明方の烏「カア〳〵」馬のいなゝき「ヒイン

〳〵(長持入足の唄)「坂はナア照る〳〵ナアエ、鈴鹿は曇るナアレアエ、どッこい〳〵」(船頭を呼ぶ聲)「船が出るヤアイ〳〵」(此時宿屋の女起しに來り)「モシいんま一番船でおます、御膳を上げましよ」(彌次)「オイ〳〵」(喜多八サア起きや(と、二人は起出て手水つかふ内、膳も出て食ひしまひ、かれこれする内宿の亭主)「お支度はようおざりますか、舟場へ御案内致しましよ」(喜多)「夫れは御苦勞、サア彌次さん出かけやせう(と、そこ〳〵に支度して表の方へ出かける。宿の女房、女)「御機嫌よう、又お下りに」(彌次)「アイお世話になりやした(と、暇乞して舟場へ行く。亭主此處迄送り來り)「船頭衆お二人樣ぢや頼みますぞ」(彌次)「ときに忘れた、お亭主さん昨宵ア、お約束のあの小便の竹の筒は」(亭主)「ホンニちんと切らして置きましたに、ドリヤ取て參りましよかい」(と、亭主彼の竹の筒をとりに歸る。此渡し船七里の海上、一人前四十五文ヅツ、其外駄荷乘物皆それ〴〵に賃錢を拂ひ船にのる。此時亭主竹の筒を取ツて來り)「サア〳〵お客樣そこへ投げますぞ」(喜多)「なんだ火吹竹か」(彌次)「これをあてがッてナ、とやらかすのだ、よし〳〵、イヤ御亭主さん大きに御世話、サア是で大丈夫だハ、、、、

おのづから祈らずとても神います宮の渡しは浪風もなし

かく祝しければ、乘合皆々勇みたち、やがて舟を乘出して、順風に帆を揚げ、海上を走ること矢の如く、されど浪平かなれば、船中思ひ〳〵の雜談に、頃のかけがねも外づるしばかり、高聲に笑ひのゝしり行くほどに、あきなひ船幾艘となく漕ぎちがひて「酒飲まッせんかいな、名物蒲燒の燒きたて、團子よいかな、奈良漬で飯食はッせんかいな〳〵」(彌次)「アヽよく寢たわ、いつの間にやら、どうぎに來たぞ、時に小便が洩るやうだ(と、宿屋の亭主がくれたる竹の筒を出して、こゝでこそと前にあてがひ小便をする。此竹の筒は火吹竹の如く、先の方に穴を明けたるなれば、船の緣にもたせかけて小便をするつもりの所、彌次郎の心には、穴の明いてあるには心づかず、洩瓶のやうに思ひ、竹の筒へ小便をしこみて、あとでうちあける事と心得、船の中にてすぐに竹の筒へしこみければ、先の穴より小便が流れ出て、船中小便だらけとなり、乘合皆々膽をつぶし)「コリヤ〳〵何ぢやいな、水がえらう流れる」(乘合)「だれか土瓶をうちこかいたさうな、ソレ〳〵烟草入も紙入もびッしよりぢや、コリヤたまらん」(彌次)「ヤアおまえ小便ぢやな(と、咎められて彌次郎竹の筒の隱し所にうろたへて、まご〳〵する)」(喜多)「エヽ彌次さん、どうしたものだ、おめェ小便をするなら、そけえあがッて竹の筒の

先の方を海へ出して、しこむのだはな、滅相な、船の中が小便だらけになッた、エ、きたねえ〳〵（弼次）おれは又こゝでしこんで、後でぶちまけるのかと思つた（喜多）イヤはや途方もない、コレヤア臭くてならんわい船頭衆〳〵、もう敗物は外にはないか（船頭）誰ぢやそい、小便をしたのは、船玉様が汚れる、早うコレ拭つせいな（喜多）エ、氣の利かねエ人だ（船頭）エ、ソレまだ竹の筒から落ちる、それもほかして（捨てゝ）しまはッせエな（弼次）イヤ此れはそッちへやらう、火吹竹にならうから、（喜多）エ、おめえが小便した物をナニ火吹竹になるものだ、早く拭きなせえ、埒のあかぬ（と、いぢめられて彌次郎犢鼻褌をはづし、そこらを拭く内、喜多八は薄べりをひツくりかへして敷き直し）（喜多）サアゝ、これでいゝ、どなたもお座りなせえ（弼次）コリヤ皆様御免なせえ、とんだ番狂はせを致しやした（と、ついに無くしよげかへりて、そこら取り片付ける。乘合皆々苦笑ひしてだんまりで居る。此内早くも船は桑名の岸に至る）（乘合）（來たぞ〳〵、小便にこそ濡れたれ、船は悪なく桑名へ來た、めでたい〳〵と、みな〳〵これより上がりて此宿に祝ひの酒酌みかはしぬ。

東海道中膝栗毛四編　卷之下終

東海道中膝栗毛五編序

歌人は居ながら名所を知り、雅人は行きて名所を探ぐる。今年五篇目の膝栗毛を十返舍の主人、心の手網をかいくりかいくり、くりかけ見れば伊勢の海、千尋の濱に深く穿がちて、洒落を花なる貝盡し、古跡を溫ねて新しき、趣向を見する筆のすさみに、予も疲ながら名所を、しり馬はねる顏にて、序すること、是作者の需に應じてとは、うその皮、需めもせぬに筆を採りしは、後の一杯がすぎ田の梅の、香にひかれたるうかれ心、これも亦餘慶の仕事と謂はんか。

文化丙寅春

龜山人蘭衣誌

附言併凡例

予今年神無月廿日あまり、六日の朝思ひ立て、東海道に杖をはせ、伊勢路に赴き、内外の宮巡をして歸しは、雪見月の五日になん。そよりして此の五編目の著述にかゝり、彫工机のもとに絶ず、須臾も筆をおく間なし。然るに何の人の編りけん、膝栗毛續編といへるもの皇都の書肆より下したりとて、上總屋忠助なる人のもとより予が方におこせたり。予是を閲するに、其排設約にして、滑稽もとも工みなり。惜しむらくは斯る筆の文をもて、などて自立せざると不審けれ。そは名を索むる人に非ず、欲に馳するの徒なるべき歟。されど予が爲の引札にして思はざるの幸甚なりき。此故に今五編目に至るまで、頓て見んことを競ひ給へる人のあなりと、書肆の喜びは、益々膝栗毛の尾に尾をひかんとを推量

れるにや覺束なし。○或人曰、此書初編より四編に及ぶ迄、彌次郎兵衛喜多八なる者の、髮結月代をせし所を見ず。こは大江都を立ち出でしより以來、其事無きは如何にぞや、予答曰、此度旅行の刻、屐その光景を見るに、風土人情の差別、方言の可笑しみ、其洩たる事、缺けたる事算ふるに十指を出たり。さればその足ざるを穿ち難じ給はるこそ、予が爲の幸なれば、取り敢ず其事をもて追加に出せり。○羇中飯盛おじやれの戯れは、卷中毎に粗あらはして事ふりたれど、此度作者の旅寢にて、實に夜這といへる事を仕損じたるとのあなれば、其事をもて彌次郎兵衛喜多八が四日市泊りの趣向とす。○東海道追分までを上卷とし其餘伊勢路に掛て、事繁く記すに遑あらず。漸く山田に此卷の筆を擱て、續編に妙見町の奇宿、古市の遊樂、相の山の宮遶り等を著し續て出版す。

初逢十返舍一九生自勢州還戯賦以送

一遍相逢親十回
翻々乘二膝栗毛一來
兼々聞及貴公才
探得神都神代穴

瀬芳園草

東海道中膝栗毛五編 卷之上

宮重大根のふとしく建し宮柱は、風呂吹の熱田の神の慈眼す、七里のわたし浪ゆたかにして、來往の渡船難なく、桑名に着きたる悦びのあまり、名物の燒蛤に酒酌み交して、かの弥次郎兵衛喜多八なるもの、やがて爰を立ち出で辿り行く程に、此頃旅人の唄ふを聞けば流行唄「時雨蛤土産にさんせ、宮のお龜が情所」ヤレコリヤ、よウし〳〵よし 馬士「コレ旦那衆、戻り馬乘らんせんか 弥次 よウしよし 馬士「やすいに只百五十でやらまいか 弥次 よウしよし

喜多「せうろく四文で乘るべいか 馬士「そんなちよウせよせ 馬「ヒイン〳〵 長持人足「船はナア、迫手に帆かけて走るナアンエ、早くサア、熱田に泊りやナアンアエ、八兵衛どうして、馬でものんだかなんだかはねらア、どッこい〳〵 喜多「なんと弥次さん、何も慰みだに、斯うしようぢやアないか、おめえの荷物とわしがのを、一緒にして、一人がひッかついで、半日代りに旦那と家來の仕打はどうだらう 弥次「コリヤ面白え、それよからう、先づおいらから旦那を始めるぞ

喜多「それやアいゝが、今日はもう八ツだから、七ツ代りにしやせう、勿論旦那と供のあしら

ひは、互に番狂はせ無しにやらかしやせうぜ 彌次「知れた事よ（と、云ひつゝ、あたりに竹一本を才覺し、彌次郎が荷物と喜多八が包を兩方に括りつけて）喜多「先づ年役におめえ旦那よ、おいらは上下といふもので出かけよう、ナント餘程氣がきいて居るだらう（と、後から荷をひッかたげて）喜多「モシ旦那え 彌次「なんだ 喜多「いゝ天氣でござります 彌次「オゝサ、風がないで、暖たかだ 喜多「さやうでござります（と、假に主從の如く打語りつゝ行く程に、早くも大福村、安永村をうち過ぎて、町屋川に差しかゝれば、彌次郎兵衛とりあえず）

旅人を茶屋の暖簾に招かせてのぼりくだりを町屋川かな

かく打興じて、なを村、おふけ村に迫り着く。此あたりも蛤の名物、旅人を見かけて火鉢の灰を煽ぎだて〳〵 女「お這入りなさりまアせ、諸白もお飯もござりまアす、お支度なさりまアせ〳〵 駕「駕いかまいかいな、これから二里半の長丁場ぢや、安うして召さぬかい 喜多「イヤ駕は入らぬ 駕「あとの親方、旦那を乘せ申してくだんせ、戻りぢや、やすめに 喜多「旦那はお徒歩がお好きだ 駕「さう云はずと、モシ旦那、安うしてやらまいかいな 彌次「安くてはいやだ、高くやるなら乘りやせう 駕「そしたら、高うして三百頂きましよかいな 彌次「いやだ〳〵、も

ちッと高くやらねえか 駕「ハアまんだ安いならやみげんこ（三百五十）で 彌次「壹貫五百計なら乘ッてやらうか 駕「エ、滅相な、わし共も商賣冥利、そない（其樣）にやッと（澤山）は頂かれませぬ、せめて五百で召して下んせんかい 彌次「それでも安いからいやだ 駕「ナアニ安いこんではあらまい、そしたら別れに七百くだんせ 彌次「イヤ〳〵面倒だ、何かなし一貫五百よりまからぬ〳〵 駕「はて扨困ッたもんぢや、夫よりちッ共まからまいか 彌次「まからぬ〳〵 駕「エ、なんの事ぢや、駕籠舁の方から値切ると云ふは珍しい、まゝよ棒組、壹貫五百でやらまいかい、サア旦那召しませ〳〵 彌次「それでいゝか、高く乘ッてやる代りに、酒手をこッちへ貰はにやならぬが合點か 駕「あげますとも 彌次「そんならさきへいッて、壹貫四百五十文。こッちへ酒手に差し引いて殘五十の駕賃だが、それで承知かどうだ 駕「エ、〳〵そんなこんであらす、とひやうもない 駕「そこでまづ緣きりだ、ハ、〳〵 喜多「こいつは旦那が出來た〳〵

たび人を乘せるつもりでかごかきの高い直段にかッがれにけり

かくて朝明川、松寺と打過ぎ、富田の立場に至りけるに、爰は殊に燒蛤の名物、兩側に茶屋軒を並べ、往來を呼びたつる聲にひかれて、茶屋に立寄り、腰をかくると 女「お早うござりま

した(と、茶を二ッ酌んで來り、彌次郎へさし出す。彌次郎は旦那のつもり故、草鞋のまゝ茶屋の板の間にあぐらをかき)彌次「喜多八、支度はいゝか(喜多八も約束なれば供の氣取にて)

喜多「宜しうございませう、コレ女中、お飯を二膳出してくんな　女「ハイ〳〵蛤でお召なされますか　彌次「イヤ箸で食ひやせう　女「オホ、、、(と、箱にした圍爐裏の樣な物の中へ蛤を並べ、松かさをつかみこみ、煽ぎたてゝ燒くうち)　彌「コウ酒は良のがあるかの、併し諸白ではなくて、片白には困る、そして江戸ぢやア甘え物の食ひあきしてゐる體だから、道中の物は、ねッから食へぬ、馬に乘ればあぶなし、駕はあたまがつかえる、店の者どもが、お宿の駕をお吊らせなさるがよう御座りますといひをッたが、成程さうすればよかッた、不肖して乘れば乘るものゝ、もう〳〵道中駕には飽き果てた、喜多八これからは歩いて行かう、いゝ草履があらば買つてくりやゝ、穿きつけぬ草鞋で、コレ見や、足中が豆だらけになッた　喜多「ほんになア、今日はじめて草鞋をお穿きなさッたから、古い皰が再發した　彌次「とんだことを云ふ、之は餘り足が柔だから、草鞋の紐がくえ込んだのだ、ヤ時に蛤は　女「ハイ只今あげます(と、大皿に燒蛤を積み重ねていだし、飯を二膳盛つて來て据ゑる)　喜多「コウ彌次さん見なせえ、色

男は違ッたもんだらう、コレ〳〵、こゝの娘がおめえの飯はちッと盛ッて、おいらがのは此通り山盛り、餓鬼道の一里塚といふもんだ、アゝうめえ〳〵　彌次「ヘゝ笹棒め、アノ娘が杓子あたりのいゝのを惚れたのだと嬉しがるもをかしい、ソレヤア手めえを安くするのだわ、

喜多「なぜなぜ　彌次「總て此街道では、上下の者や供の者へは、飯を山盛りにして出すといふとだ、それだから誰が口にもおれは旦那、手めえは御供と見えるから　喜多「ハアさうか、いめえましい　彌次「ハゝ、、、蛤をもッとくんなせえ　女「ハイ〳〵(又燒きたての蛤を大皿に盛て出す)

彌次「おまえのなら猶甘からう(と、女の尻をちよいとあたる)　女「ホゝ、、、旦那樣はようほたえ(戯れ)てぢや　喜多「おれもほたえよう(と、同く尻をつめりにかゝれば)　女「コレよさんせ、好かぬ人さんぢや　喜多「どうでも、おいらをば安くしやアがる(と、ぶつ〳〵小言を云ふうち、あたりの寺の鐘がゴーン)　喜多「女中あれはなん時だえ　女「もう七ッでございます　喜多「〆た〆た、約束の通り、是からおれが旦那樣だ、コリヤ〳〵彌次郎兵衛、おれはもう馬にも駕にも乘り飽きた、是からそろ〳〵ひろひませう、いゝ草履を買ッて來やれ、穿きつけぬ草鞋で、コレ見や、豆ぢうが足だらけだ　彌次「馬鹿を云ふ、成る程手めえは足だらけだ、一ッの足がい

くつにも割れてゐるから喜多「イヤ旦那に向ッて、手めえとは何のとだ、この荷物もそッちへやらう 彌次「バテ現金な男だ、マアそッちに置きやれ 喜多「イヤさうはならぬ(と、つきつけるを彌次郎兵衛つき戻す機勢に、蛤を盛ッてある皿をひッくりかへす拍手に、燒蛤が彌次郎兵衛の懐へひよいとはいると) 彌次「アッ、、、、蛤の汁がこぼれて、アッ、、、 喜多「ドレ/\(と、懐へ手を入れて蛤をつかま〳〵)「アッ、、、(と、取り落せば、蛤臍の下へ落ちる。喜多八うろたへて、彌次郎が股引の上から金玉と蛤をいッしよに掴む) 彌次「ア、アッ、、、コリヤどうする、きんたまが焦げらア(と、云ふ中、やう/\股引の前の合せ目を廣げると、蛤はぽッたりと落ちる) 喜多「ハ、、、、先づは御安産でお目出度い 彌次「洒落所ぢやアねえ、とんだ目にあッた 女「お怪我はござりませぬが 彌次「怪我はせぬが、まだ腹の中が、ひり/\する 喜多「ハ、、、

宵薬はまだ入れねども蛤の火傷につけてよむたはれうた

夫れより此所を立出で、羽津村八幡を打過ぎ、七ッ家阿倉川に至りし頃、四日市の宿引出迎ひて「是はお早うござります、私お宿をお頼み申上ます 彌次「わッちらア帶屋へ行きやす

宿引「イヤ今夕はお大名様おふたかしらお泊りで、帶屋は兩家ともお支し合でござりますから私方にお泊り下さりませ(と、いふは嘘なり。御小身様のお泊りで、下宿は僅なれども、夫をいひ立てに、宿引わが方へ泊めんとする計略なり。二人ともぼんくらなれば實と思ふ) 彌次「そんなら貴様の所はいくらで泊める 宿引「ハイそれはいかやうとも 彌次「昨宵は宮の斧屋に泊ッたが、とんだ叮嚀にした、百五十で燭臺をつけて飯を食はせるし、そして酒も菓子も出したから、コレヤア默つても居られめえと、別に茶代を貳百やる積りの所、やッぱり遣らなんだから、大きに安かッた、貴様の所もその積りで馳走するがいゝ 宿引「畏りました(と、だん/\咄しながら打連れて行くともなしに四日市の棒端に至れば、宿引かけだして)「サア是で御座ります、コレおとまり様ぢや 宿の女房「お早うお着きなさいました(と、挨拶の内、二人は草鞋を解きながら見廻せば、至ッてむさくろしき宿にて、入口に煤けかへッて、横にいがみたる膳棚と、こはれかゝりし箍のある内なり) 亭主「今晩は、私方も込みやひました、お氣の毒ながら、奥のお客と御一所になされて下さりませ 彌次「隨分よしさ 女房「左様ならこれえ(と、案内して奥の間へ連れ行く。合宿田舍者二人あり) 彌次「御免なさい 田舍者「お早うござらッせえた。

喜多「ア、草臥れた、えいとこな　女「すぐにお風呂に召しませ、御案内致しませう喜多「ドリヤ
お先え参らう(と、手拭をさげて湯に行く、此内十四五の前髪、風呂敷包の箱を下げて)「お煙
草は入りませぬか、楊枝、齒磨、お鼻紙はよろしうございますか　田舍「久しかぶりで、吉田の
大竹へのたり込んで、おやまに淺柄の煙草貰ひをッたが、皆吸うてしもうた今一人の田舍者「四文
粉はあらまいか　商人「イヤそれはございませぬ、是をあがッて御らうじませ　田舍「ドレドレ、パ
ック〳〵、こりやねからたわいが無い、こッちらのはどうぢやい(と、煙管についですッぱ
〳〵)　商人「夫れがようございませう　田舍「イヤ是れもねから火がつかぬ、見やんせ、吸うてを
るうち消らかいた　商人「ソレあなたの膝に燃えてをります　田舍「ヤアコリヤ〳〵大事のきりもん
(着物)を燃らかいた、フッ〳〵、イヤこないに膝の焦げる煙草は入らない、持ッていかんせ
商人「ハイ左様なら(と、小言いひながら出て行く、喜多八湯よりあがりて)　喜多「サア彌次さん
湯にはいらないか　女「あなたお召しなさりませ　彌次「イヤ大分仇な奴等がちらつくぜ、喜多八と
どこに「今の奴を、風呂場でちよいと契ッておきは早からう　彌次「ソリヤ本統にか、ごうして
〳〵　喜多「おれが湯に入ッてゐる所へ、おぬるくはございませぬかと云ッて、うせをッたか

ら、直にそこで約束した、まだ一人い〳〵、年増が見えるから、おめえ湯に入ッて待ッてゐなせ
え、大方其處へ來るには違はねえから、そこで口をかけるがい〳〵　彌次「承知々々、ドレ入ッて
來やせう(と、彌次郎は湯にいる。また一人商人)「ハイ燒酎は入りませぬか、白酒あがりませ
ぬか　喜多「オットその燒酎を少しくんな、オト、〳〵、よし〳〵(と、茶碗につがせて錢を拂ひ、
かの燒酎を脚に吹きかけ)「よし〳〵これで草臥がやすまるだらう、どなたも御免なさい、ヤア
えいとこな(と、横に寢かける。此内彌次郎は湯に入ッて女の來るのを待てども待てども一向
に來らず、手足の指を一本〳〵に洗ひて、暫くの内待ちぼうけとなる。あまり長湯をして
湯氣にあがり、風呂場の羽目に凭れて、ぐにやりとなりゐる。喜多八は餘りに彌次郎が長湯な
る故、そッと風呂場へ覗きに來り、このでいを見て)　喜多「ヤア〳〵〳〵彌次さん、どうした
〳〵、コリヤ大變だ(と、彌次郎が顏に水を注ぎ)「彌次さん〳〵　彌次「オ、〳〵、ウ、ウ、、、
喜多「い、か〳〵、どうしたのだ〳〵　彌次「どうした所か、手めえおれをえらい目に逢はした、
喜多「なぜ〳〵　彌次「湯に入りながら、もう女が來るか〳〵と思ッて、あんまり長湯をしたから
喜多「それで湯氣にあがッたか、ウ、、、、智惠のねえ咄しだ　彌次「手めえのお蔭で、まだ足がひ

よろ〳〵する 喜多「ハ、、、、こいッはをかしい、サア起ちな(と、やう〳〵に着物を着せ、喜多八が肩にひッかけ、座敷に連れて歸ると、そのまゝ倒れて左も力無ささうに) 彌次「アゝ〳〵今少しはッきりした 喜多「おめえもとんだものだ、いゝ加減にあがればいゝに 彌次「イヤおれも、手めえの云ッた通り大方女めが來るだらうと、待ッた程に〳〵、向ふの流しに、かの年増らしいやつが、何か洗ッて居るから、コレ背中を流して下せえと云ッたら、ハイと吐いて六十ばかりの婆アめが、たはしを持ッて來やアがッて、お背中を洗ひませうかと吐かしやアがる 喜多「こいッはいゝ(と、夢中になり、寢轉ッて居ながら、足の指にてあとの方に寢ころんでゐる田舍者の、耳をひッぱッたりなにかして、もちやそびにする。此田舍者とんだ氣のよい男にて、そッと傍の方えあたまをよけると) 喜多「夫れからどうした 彌次「聞いてくれ、おれもあんまり業腹だから、いま〳〵しい婆アめだ、たはしを持ッてどうしやアがると云ッたら、ハイ〳〵とぬかしてひッこんだが、やがて又庖丁の折れたのを持ッてうしやアがッて、これでお背中の垢をこそげ落してあげませうかと、おれを鍋か釜のやうに思ッてゐやアがるさうな、いま〳〵しい 喜多「ハ、、、、こいつはでかした〳〵(と、夢中になりて、又田舍者のあた

まを足にてさがしまはし、耳をいぢりかけると、忍えかねて、喜多八の足をとらへ) 田舍「コレ〳〵最前からだまッてをれば、なんぜ此足でわしが耳を嬲り物にさッせえた(と、いはれて喜多八心づきて)「ハイこれは御免なせえ 田舍「インニヤ拠御免ではじやうち(承知)ならまいわい、夫れもこなさんが、夢中にならッせえて咄しさッせる手そぶりにやア、有らまい事でもないが、こッちであたまを避けようとすると、又足で探りまわいては、嬲り物にさッせる、なんぜ人のあたまア土足につッかけさッせえた、すまない〳〵 彌次「ソリヤお氣の毒な事だ御免なせえ、此樣にお合宿するも他生の縁とやら、どうぞ了簡してやッて下さりませ 田舍「こんたがさう云はッせりやア、聽かまいものでもないが、あんまり人を馬鹿にさッせるから 喜多「イヤもう生酔だから堪忍してくんなせえ 田舍「イヤまんだこなさんは、わしどもを馬鹿にさッせる、最前から見てをるに、酒も飲まないで生酔とは猶じやうち(承知)ならまいわい 喜多「はてわッちは酒を飲みやせぬが、此足が生酔だから 田舍「ナニ足が酒を飲むもんか、馬鹿アつくさッせるな 喜多「おめえ大分あつくなるの、あしが酔ッたといふは、さッき(先刻)燒酎を吹きかけたから、それに此足めが酔ひくさッて、ソレ御らうじろ、ひよろり〳〵、アレまだおめえの

頭に、からかわうとする、コリヤ〳〵〳〵田舍「ほんに、こなさんの足は、惡い酒ぢや 喜多「左様さ、足は下戸の足がようござりやす、わッちは誠に困り果てる 田舍「そんならようござる、モウねまらまいか、女中〳〵、寢所を賴みます(と、此うち女來り、それ〴〵に床をとり、寢かすと、田舍者二人はそこへころげるや否や、前後も知らず、すう〳〵と高鼾。彌次郎喜多八この女どもに、こあたり文句もさま〴〵あれど、此ところと、めしどきの酒落はぐッとはしよる。女中どもは床をとッてしまひ、勝手え行くと、彌次郎小聲になりて)「喜多八〳〵、實に手めえさッきの女と約束をしたか 喜多「知れたことよ、併しこッちへは來ぬ積りだ、此次の間の壁を傳はッて行くと、いき當ッた所の襖をあけろ、そこに寢て居ると云ひをッたから、今に行かねばならね 彌次「おれが先へいッてやらう 喜多「嫌まずと早く寢なせえ(と、後を振り向いて寢入る眞似する。彌次郎も喜多八が邪魔をしてやらんと、寢入りしふりして考へてゐる內、二人とも旅疲れにや、思はずすや〳〵と一寢入りし、暫くすると彌次郎兵衞ふッと目をさまし見れば、行燈消えてまッくらがり、あたりもひッそり靜まりたるに、じぶんはよしと拔駈し、喜多八に鼻あかせんと、そッと起きたち)さし足にて次の間に出で、兼ねて聞き置きた

る通り、さぐり〳〵壁を傳ひて行くうち、彌次郎兵衞あまりに手を上へ延ばしたるにや、釣りたる棚板に手がつかへると、どうした機會やら、がたりといッて、棚がはづれたると見え、彌次郎兵衞大きに膽をつぶし)「こいッは變ちきだ、あんまりおれが手を延ばしたから、棚板がはづれたさうな、手を離したら落ちるであらうし、何かがらくたが、しこたまあげてある樣子、落ちたら皆んなが目を覺ますだらう、こいッは難義な目に逢ッた(と、兩手を棚につばッて立ちて居ても、ねからつまらず、手をはなせば棚が落ちる、繻袢一つで寒くはなるし、コリヤ情ない目に逢ッた、どうぞ仕樣はないかと、立ちはだかッて考へて居るうち、斯くとも知らず、喜多八も目を覺し、おき出て、これもだん〳〵壁をつたひて來る樣子、彌次郎それとすかし見て、小ごゑになり)「喜多か八〳〵 喜多「だれだ、彌次さんだの 彌次「コリヤ靜かに〳〵、早く此處へ來てくれ 喜多「なんだ〳〵 彌次「これを一寸持つてくれ、此處だ〳〵 喜多「ドレ〳〵(と、手を延ばして、何かは知らず落ちかゝッた棚の下を抑えると、彌次郎はそッと手を放し、喜多八に持たせて傍きへはづしたるに、喜多八驚き)喜多「コリヤ〳〵彌次さん、どうするのだ(と、手を放しさうにすると、上の棚が落ちかゝる故)喜多「ヤア〳〵〳〵、コリヤ

情ない目に逢はせる、コレ〳〵彌次さん、何處へ行く、アヽ手がだるくなる、コリヤもうどうする〳〵と、うろ〳〵してゐる。彌次郎はくらまぎれ、そろ〳〵と先の方へ行きこし、壁を傳ひて勝手のかたへ出るに、庭の向ふに見ゆる有明の、火かげほのかに透かして見れば、かの行きあたりの襖のそばに、一人寢てゐる者ある故、さてこそ喜多八が約束の代物、しめこの兎と、いきなり手をやッて捜りみれば、こはいかに、石の如く冷え氷りし人倒れゐたり。さながら生きたるものとも見えず、これは不思議と、こは〳〵撫で廻せば、荒筵にくるみてある故、彌次郎はッと驚き、俄に氣味が惡るくなッて、がた〳〵と震ひ出し、やう〳〵に喜多八がゐる所へ這ひ戻り、齒の根も合はぬふるえ聲にて)彌次「喜多八まだそこにか」喜多「オヽ彌次さんおめえ何處えいッた、コウ一寸と此處へ」彌次「イヤそこ所ではない、あそこに死んだものが筵へかけてあるから、もう〳〵薄氣味の惡いうちだ」喜多「ヤヽとんだことをいふ、」彌次「ナニサほんとうに、アレあそこに、アヽとんだうちに泊り合せた、恐ろしや〳〵(と、そう〳〵に這出し逃げ行く)」喜多「コレ〳〵〳〵、おれを此處においてどうする、エヽそれに、とんだことを云やアがッて、どうやら氣味が惡くなッた、コリヤたまらぬ〳〵(と、がた〳〵

震える拍子に手がゆるみて、上の棚がぐわら〳〵、こりや叶はぬと、喜多八逃げ出せしが、うろたえて途迷ひをし、一向分らず、まごつくうち、この物音に勝手よりは亭主の聲して、行燈さげて出で來る樣子、奥の間より田舍者が出て來る體故、いよ〳〵うろたへ、店の方へ這ひ出る手もとに、筵一枚ありしを幸、引ッかぶりて息をころしかゞみゐると、亭主あかりをもち出で膳をつぶし)「ヤア〳〵〳〵コリヤ、なんぜ棚が落ちた、膳箱も何も亂離忽敗になッた(と、そこら取り片付けるうち、何事やらんと田舍者二人ながら起き出で)「ヤレえらい音がせッと思うた、道理こそコリヤ地藏樣の側にまで箱どもが飛び散ッて居るが、ヤア〳〵〳〵お鼻がぶッかけてしまうた」今一人の田舍者「ドリヤ〳〵、ほんに地藏樣の鼻ア無くならかいた、そこらにや無いか、イヤ此處に寢てをるは誰ぢやい(と、筵をまくれば、喜多八は、はッとばかり顏を上げて見るに、そばには筵に包みし石地藏あり。さては彌次郎兵衛が死んだ者のありしと云ひしは、この石地藏ならんと思ひゐるうち、亭主喜多八を見て)「ヤアこなさんはこちへ泊らせえたお客ぢやないか、それに今時分なんぜこない(此樣)な所に、コリヤ合點がいかんわい、どうぢややら、こなさん達の姿素振胡散臭いと思ひをッたが、若しや護摩

の灰ぢやないか、何ぞ又しよしめる積りか、有りやうに云はッせえ 田舎「イヤそればかしぢやござらない、大方こなさんが此の棚を落したもんで、なんぜ地藏樣のお鼻ア打ち缺いた、コリヤわしどもが村で、今度建立せる地藏樣ぢや、きんのふ(昨日)石屋どのから請取ッて、明日は早々長澤寺樣へ納めにやならぬが、お鼻がうち缺けては、持ッていかれぬ、元の通り償はッせえ(これは此近在の人々村のお寺へ納める地藏也、石屋より持ッて歸る所、おそなはりし故、今宵は此處に泊りしと見えたり。亭主愈々やッきとなり)「お地藏樣のお鼻もお鼻ぢやが、おまい方のお荷物、なんぞなくなりはせないか、どうでも合點のいかぬ奴等ぢや、有りやうに云ひをりまいか 喜多「イヤわしらは、そんな者ぢやアねえ、めッたなことを云ひなさんな、わしら几帳面の旅人だ 田舎「インネ、さうぢやあらまい、又それで無けらにやア、なんぜ今時分其處に寢てゐさッせえた 喜多「イヤこれはの、手水に行くとッて亭主「たわけたことをつくさまい、手水場は座敷の緣先にあるのを、定めし宵にもいたであろに、そないな間似合くやせんわい 喜多「さう云はれちやア、わッちも面目ないが、恥を云はにやア理が聞えぬ、有體に云ひやせう 亭主「オヽサ云はいでどうせるものぢや 喜多「イヤどうもお恥かしいが、今頃わッち

が此處にまごついて居ッたと云ふわけは、ッイ夜這に來て此棚の落ちたに、うろたえたのでござりやす 田舎「ナニ夜這に來た、イヤはや、こなさんは、たはけもんぢや、どこの國にか、石地藏樣の所へ夜這に來て、どうせる積りぢや 亭主「云へば云ふ程、碌なことはぬかしをらぬ 喜多「コリヤとんだ災難に逢ふことだ、彌次さん〳〵(と、呼び立てる、先刻より彌次郎は立ち聞して、腹筋を搓りゐたりけるが、もうよい時分と立ち出で)「コレアマどなたもお氣の毒な、あれやアわッちが受合、胡亂な者ぢやアござりやせぬ、料簡してやッてくんなせえ、又地藏樣の鼻とやらが缺けたと云ひなさるが、どうぞわッちに免じて、後ではどうとも致しやせう(と、色々ちやらくらと斷りを云ひちらし、亭主も今はせんかたなく、さながら惡者とも見えぬ手あひ、一通りは云つたものゝ、今は納得して濟ましければ)

はひかけし地藏の額も三度笠またかぶりたる首尾のわるさよ

かく卽吟の彌次郎兵衛が狂歌に、おの〳〵どッと笑を催し、やう〳〵いさくさをさまりけるにぞ、未だ夜の明くるには程もあらんと、銘々寢所に這入りたるが、暫くありて早一ばん鷄の告げわたる聲々、馬の嘶き表に聞え、彌次郎兵衛、喜多八急ぎ起き出て支度整へ、やがて

此宿を立ち出づるとて

やう〳〵と東海道もこれからはなのみやこへ四日市なり

それより濱田村を打ち過ぎ、赤堀に差しかゝりたるに、往來殊に賑はしく、男女大勢此處彼處につどひ集まりたるは、何事にやと、彌次郎兵衛喜多八も片寄り行きつゝ、ある親仁に向ひて彌次「モシ〳〵何でござります親仁「あれ見さッせえ喜多、喧嘩でもござりやすか親仁「インネ、天蓋寺の蛸藥師さまが桑名へ開帳に行かしやるので、今こゝを通らッせるから彌次「ハヽア成程向ふへ見えるし〳〵(と、此内だん〳〵人足繁くなり、講中と覺しく、眞先に村の名を染めたる幟をおし立ていづれも大音にて)講中「なアまアだア〳〵喜多「蛸藥師様アゝゆでたのぢやアねえ、なまだと見える講中「なアまアだア彌次「幟を持ッていく奴の面ア見さッし、智恵のねえ面だぜ講中「お猥褻はこれべし〳〵、是は海中より芋畑へ出現したまふ所の、天蓋寺蛸藥師如來、御信心のかたはお心持次第あげさッしやりませう、サア〳〵お心持はようござりますかな喜多「今朝程は中がさで三膳ほど食べました彌次「ソリヤ蛸どのがござッた〳〵(と、此内御厨子に入れたる藥師如來大勢にでかつぎ通る。あとより天蓋寺の和尚乘物にて來ると、此處

彼處に集りゐる婆、嘸ども十念を願ひけるに)若黨お十念〳〵(と、云ふと、乘り物をおろす。若黨駕の戸を引きめくれば、和尚はゆで蛸の如き赤ら顔にて、大痘痕、髭だらけの、でッくり和尚、さもしかつべらしく)「なむあみ皆々「なむあみをしやう「なむあみ皆々「なむあみ(和尚なむあみと段々唱へ、十念の終にどうした機勢やら、鼻の穴がむづ〳〵として)をしやう「ハアくッしやみ(と、云ふと、皆々十念のあと故、これも口眞似する事と心得)皆々「ハアくッしやみをしやみから長老だ、ハヽヽヽ講中なアまアだア〳〵(と、ざゞめき立ち行き過る。彌次郎喜多八はをかしく、あとを見送り乍ら)

十念を申しながらのぐつさめはあつたら口に風をひかせし

かく詠みすてゝ打興じ行く程に、早くも追分に至る。此所の茶屋饅頭の名物あり茶屋女「お休みなさりまアせ、名物饅頭のぬくといのをあがりまアせ、お雜煮もござりまアす喜多「右側の娘が美しいの彌次「饅頭屋の小娘よくめらも愛嬌らしい(と、茶屋に這入り腰をかける)女「お茶アあがりませ彌次「今あげませう(と、やがて盆に盛ッて來る。

このうち金毘羅參と見えて、布この上に、白き單衣の袢天を引ッぱりたる男、同じくこの茶屋に休み、雜煮餅を食ひかかる。彌次郎饅頭を食ひしまひ)「もッとやらうか、いくらでもはいるやうだ 喜多「イヤおめえも雨風どうらんだ、いゝかげんにしなッせえ 金毘羅「あなた方お江戸かな 喜多「左樣さ 金毘羅「私もお江戸へいた時、本町の鳥伺の饅頭を賭得して、二十八食ッたことがござりましたが、又格別なものぢや 彌次「鳥伺はわッちらが町内だから、毎日茶うけに五六十ヅゝは食ひやす 金毘羅「それはえらいお好きぢや、私も餅好で、御らうじませ、此雜煮を息なし五膳たべました 彌次「わッちア今こゝの饅頭を十四五も食ッたらうが、まだその位はいけるだらう、ねから食ひ足らぬやうだはえ 金毘羅「イヤ併し、惡甘い物は、もう其やうにはあがられますまい、十四五もあがりやア關の山だ 彌次「ナニまだ食へやす 金毘羅「どうして〳〵、あなた口ではさうおッしやるが、そのやうには食へぬものぢやて 彌次「ナニ食へねえことがあるものだ、併し費だから食ひやせぬが、誰ぞ食はせると、まだ〳〵いくらでもはいりやす 金毘羅「コレハ面白い、モシ無しつけながら、何と私がお振舞ひ申しませう、もうそれだけあがッて御らうじませぬか 彌次「食ひやせうとも 金毘羅「もしあがらぬと、貴方のお倒れぢやが、よう

ござりますか 彌次「そりや知れたことさ(と、圖に乘ッて饅頭をとり寄せ、食ひかゝりしが、十ばかり食ッて、あとはもうおくびに出る位なれど、おのれ金毘羅、鼻あかせてやらんと、無理におし込み皆くッてしもふ)金毘羅「コリヤたまらぬ、えらい〳〵、もう〳〵私はかなひませぬ 彌次「おめえもやらかして見なせえ、こんな小さな物はいくらでも食はれる 金毘羅「イヤさうは參りませぬ、併し私もあまり殘念な、十ばかりたべてみませう 彌次「ナニ十ぐらゐ、二十食ひなせえ、その代り、一つも殘さず食ひなすッたならば、饅頭の代は勿論、外に百文金毘羅樣へお初穂をあげやせう 金毘羅「そりや有難いてんぽの皮、やッて見ませう(と、饅頭二十取り寄せ、たゞもじ〳〵と見てばかりゐたりけるが、やがて食ひかゝると、ぽつり〳〵十ばかり食ッてしまひ、あとはいやさうな顏付にて、やう〳〵と殘らず食ッてしまふ。彌次あてが違ひ) 彌次「コリヤ恐れる〳〵 金毘羅「お約束の通り饅頭代はさし引いて、お初穂の百文下さりませ 彌次「今上げやせう、併しあんまり見事だから、もう二十食ひなせえ、今度はお初穂を三百上げやせう、その代り食はねえと、こッちへ二百とりッこだが、どうだ〳〵 金毘羅「面白い〳〵、何も慾徳、腹の裂けるまでやッて見ませう 彌次「サア〳〵今度は現錢だ、おめえも二

百そこへ出しで置きなさい、彌次郎三百文を突き出し、なんでも今取られたお初穂の百文に利な取る氣になり、よもやもう食はれまいと思ひ込んで、饅頭を又々二十取寄せ、金毘羅へすゝめるや否や、このたびは何の苦もなく忽ち二十食てしまひ、手早くかの三百文を着服して）金毘羅「これは有難い、饅頭の代も宜しうお頼み申します。ハ、、、、思ひがけないおざうさに預かりましたゝ、ハイゆるりとこれに（と、お神酒箱を背に負ひ、あとをも見ずして出て行きたるに、彌次郎は呆れはてゝおる）喜多「ハ、、、、夫方こんな事にならうと思ッた　彌次「いまゝしい日に逢はしやアがッた、初の百が惜しくなッて、上乘をした、業腹な（と、此うち下の方より駕籠昇ぶら〳〵と來りて）「旦那方はお駕は入らしやりませぬか　彌次「駕所ぢやアねえ、えらい日に逢ッた、饅頭の食ひごッこをして、錢三百只取られた　駕「ハ、ア今の金毘羅めぢやなゝできめはあないな風をしてあろきをるが、アリヤ大津の釜七と云ふえらい手づまッかひぢやげな、こんぢうも坂の下で餅の食ひくらで、七十八とやら食らッと見せて、錢は人に拂はせ、餅をぱみんな袂へさらひ込んで、うせをッたといふ事ぢやが、旦那も一杯箱められさッせえたの、ハ、、、、（此話しのうち、伊勢參りの子供二人、饅頭を三ッ四ッづつ手に持ちて食ひながら、この門口へ來り）伊勢參り「ハイ旦那様、拔參詣に御ほうしや　喜多「コレ手めえ達やア、その饅頭を誰に貰ッた　伊勢參り「ハイコリヤこのあとで金毘羅參りの人が袂から出してくれました　彌次「エ、そんなら、あいつめが食ッたと見せやアがッて、おいらを欺くらかしやアがッたか、いま〳〵しい、ぼッかけてぶちのめさうか　喜多「いゝわな、おいらも神參りだ、堪忍してやりなせえ、みんなこッちが間拔だからよ、ハ、、、、　彌次「それだとッて、あんまり業が煮えかへる　喜多「昨宵の泊りで、おれをえらい目に逢はせた　その報だと思ひなせえ、ほんにいゝ業晒しだ）

盜人に迫分なれや饅頭のあんのほかなる初穂とられて

彌次「エ、面白くもねえ、酒落やんな、モシ〳〵饅頭の代はいくらだね　女「ハイ〳〵殘ずメて貳百三十三文でござります　彌次「せう事がねえ（と、ふせう〳〵に錢を拂ふと）　駕「旦那さんなほしに安く召して下さりませ　彌次「いや〳〵　駕「酒手で參りましよう　彌次「貴樣酒を呑むかういやだ〳〵、サア喜多八出かけよう（と、これより伊勢參宮道へはいる）。

東海道中膝栗毛五編 卷之上終

今古文學與附
定價金二十五錢均一

明治四十四年七月五日印刷
明治四十四年七月十日發行

校訂者 中內蝶二
編纂者 鍾美堂編輯部
東京市日本橋區本銀町三丁目二番地
發行者 福岡元治郎
東京市日本橋區橋山町三丁目十四番地
發行者 中村儀三郎
大阪市南區安堂寺橋通三丁目二番地
發行者 中村寅吉
東京市牛込區水道町二十五番地
印刷者 福山福太郎
東京市牛込區水道町二十五番地
印刷所 福山製本印刷所

不許複製

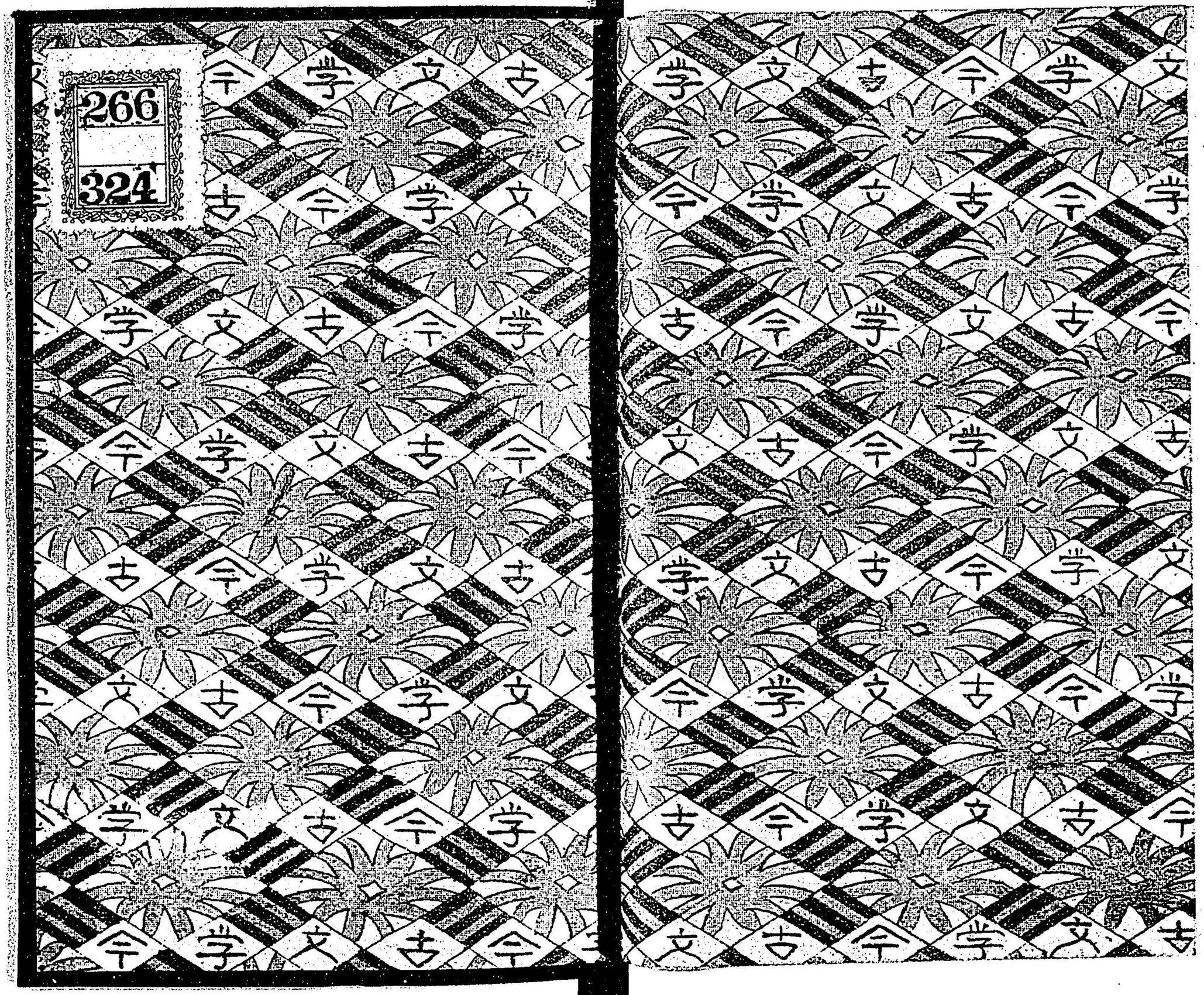
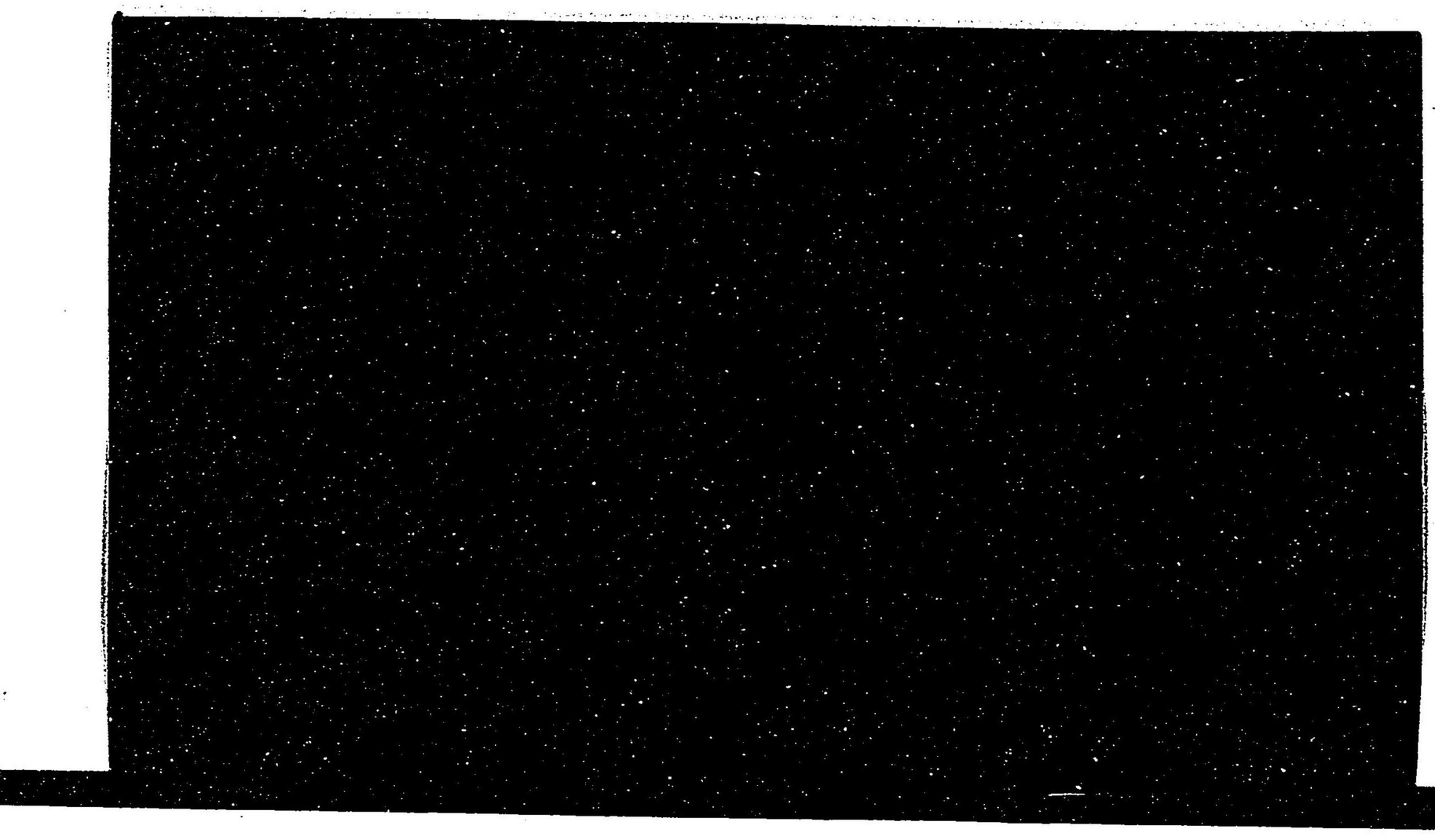
著作權所有

發行所 東京市日本橋區本銀町三丁目
大阪市南區安堂寺橋通三丁目
鍾美堂書店
振替貯金口座東京四八二〇番
振替貯金口座大阪四五七番

今古文學目錄

毎冊金貳拾五錢

第一編	赤穗義士參考內侍所	上
第二編	伊達顯秘錄	全
第三編	水戸黄門仁德錄	全
第四編	寛永箱崎文庫	上
第五編	大久保武藏鐙	上
第六編	柳荒美談	上
第七編	赤穗義士參考內侍所	下
第八編	東海道中膝栗毛	上
第九編	通俗吳越軍談	上
第十編	椿說弓張月	上

以下逐次發行

266
324